

## 被災地邦人の Well-being に関する考察 — ニュージーランド・カンタベリー日本人会へのインタビュー調査を通して —

中部学院大学人間福祉学部 宮 嶋 淳 (4662)

〔キーワード〕 被災地邦人、カンタベリー日本人会、インタビュー調査

### 1. 研究目的

ニュージーランド・クライストチャーチ市は国際的にも庭園都市と呼ばれ、ニュージーランドにおける有数の観光地であるとともに、日本からの留学生も多く滞在している地域であった。この地を襲ったカンタベリー地震は、2010年9月にM7.1を記録し、翌年2月にもM6.3、3度目の大地震が同年6月M6.0の規模で起こっている。ニュージーランド政府は、震災対策の直轄機関としてCERA (Canterbury Earthquake Recovery Authority) を設け、コミュニティーの復興や住民支援を行なっている。こうしたニュージーランドの行政施策の推進には、住民の参加・参画と合意形成が欠かせない。とくに状況並びに実態把握は今後の復興を展望する上で欠かせず、移民の状況把握は移民の組織等を通じて展開されることが多い。

そこで、報告者はクライストチャーチ市に住む、約2千人の日系移民が被災後の今とこれからをどのように生き抜こうとしているのかを聴取し、被災地邦人の Well-being に欠かせない諸要件を明らかにすることを目的として、現地を訪問し、現地の状況をアクションリサーチし、日系移民の代表者であると目される日本人会の代表者にインタビュー調査を行なうこととした。

### 2. 研究の視点および方法

ニュージーランドへの移民は、1890年からと古い。移民の歴史の中で同胞組織、具体的には「日本人会」は、多方面で研究的として注視されてきた。この日本人会とは、概して長期にわたって海外に在住する日本人の交流の場として、発展・継続されてきた団体であり、その役割は「共益」の追求であった。一方、国の機関である大使館は、在留邦人が安全にビジネスを行なうことや犯罪にまきこまれないための予防に備え、手引きやマニュアルを作成・配布し、大規模災害に備える緊急事態対処マニュアルも作成し、①日頃からの心構え・準備、②緊急事態発生所の行動、③緊急連絡先などを公表している。ここに認められる当事者組織と国のサポートは、共益の追及と安全の確保が第一目的であるといえ、人々の Well-being を探求する福祉が与する領域、あるいは社会福祉学の研究領域とは距離を置く領域ととらえられてきたのではないだろうか。しかしながら、わが国における災害事案が、社会福祉学のターゲットと目されている今、在留被災民の Well-being の確保は、Crossing Borders やグローバルな視点から社会福祉学における研究課題の一つであると考えられるものである。

本研究は、カンタベリー日本人会を調査の対象とした。カンタベリー日本人会が解説するホームページを分析的に理解し、同会が発行するニューズレター「ひろがり」の震災特集号の記事をコンテキスト分析し、インタビュー項目を構成した。インタビュー項目は、事前に E-mail において同会に送信し、調査の趣旨、内容の確認並びにインタビューにかかる場所・日時・人数を調整した。インタビューは、日本人会の6名の理事に対し半構造化面接の手法を用いて行い、結果はICレコーダーに記録した。音声記録は専門業者にテープ起こしを委託し、テキスト化された後に、報告者が内容を再確認している。テキストデータは、用例・例示並びに言い誤りを削除し、方言を標準語に変換した後、文脈を重視しながら要約を第三次まで行なった。その後、西條が提唱す

る構造構成的質的研究法 (SCQRM) をメタ理論とし、コンテクストの形態素分析、名づけ、概念化、カテゴリー化、カテゴリー間の構造並びに相関分析、再ストーリー化を順に行ない、結論を構成した。

### 3. 倫理的配慮

カンタベリー日本人会の理事に対して、E-mail によるインタビューの背景並びに質問項目を示したうえでアポイントをとり、インタビュー当日においても、同文書を示し、口頭で了解をとった。同了解は IC レコーダーに音声として記録されている。また、本報告を行なうこと並びに今後、論文化し公表することについて了解を得ている。

### 4. 研究結果

分析により抽出されたカテゴリー&サブカテゴリーは以下のとおりである。

カテゴリー	サブカテゴリー
震災	壊滅状態、被災者になる備え、温度差、「まさか」への対応、1～2カ月後
日本人会	代表への変化、いろいろな責任、参画する組織、マイノリティ・コミュニティー コミュニティーの動き、理事はボランティア、時間を犠牲
日本人会の役割	情報発信、安否確認、代弁、連携の継続、防災対策、移民の結束
日本人	インフォメーション、スティグマ、イレギュラーなケースに弱さ、外国で感じる ソウル、日本人の誇り
NZ人	個々で動く能力が高い、バラバラで動ける、フォーメーション
移民	母国語、世代間での言葉の変化、行政への働きかけ、当たり前な生活の権利の主張
イベント	コネクション、愛情・友情を生む、安否確認、意味にも温度差、忘れたい風潮 間口の広さ、知る機会、リフレッシュ、エンタテインメントはツール
居場所	力・知恵が生まれる、普段のつながり、横のつながり
やるべき活動	予備知識や訓練、組織を見直すきっかけ、この地で生きていく、共存、知識の継承 アイデア、信頼し任せる、一員という気持ち、信用のプロセス
エキスパート	エキスパート化、ペイドとボランティア、雇用、オーガニゼーション、ネットワー ク、コミュニティーの継続、「ちっちゃい穴」を埋める
公的責任	防災のしおり、移民サポートシステムを、教育・サポート・サイト、アップデート、 防災活動、責任への対応のみ、コンスタントなアップデート、次世代の育成
コミットメント	「コミットしたい」、大人の責任、信頼感

インタビュー発話のコンテクスト分析の結果に基づくカテゴリー構造並びに相関については、発表当日、公表する。

### 5. 考察

カンタベリー日本人会は、震災を契機に、その役割を「共益」から「公益」に発展させようとしている。その過程を組織の発展と会員の Well-being の保持・促進ととらえることができるならば、それらは外部環境に相当する「他者・他団体・公的機関」からの期待が発展の誘因となっていると考えられる。

#### 【参考文献】

- 西條剛史 (2007) 『ライブ講義 質的研究とは何か ベーシック編』新曜社  
 西條剛史 (2008) 『ライブ講義 質的研究とは何か アドバンス編』新曜社  
 カンタベリー日本人会ホームページ (<http://www.jsc.org.nz/>)